

11月16日に行われた沖縄県知事選挙で、無所属新人の前那覇市長・翁長雄志さんが当選しました。現職で3選を目指していた仲井眞弘多さん（なかいまひろた）は自民、次世代推薦に大差をつけての勝利です。

最大の争点は米海兵隊の普天間基地（宜野湾市）の移設問題でした。住宅密集地のご真ん中にあり、「世界一危険な基地」の異名を取ってきた普天間基地の返還は大歓迎。でも、移設先が同じ沖縄の名護市辺野古で、しかもケタ違いに強力な新基地を建設するという日米両政府の計画に、県民がはつきりとNOを突きつけたということです。仲井眞さんはひどすぎました。県外移設を掲げて2選を果たしたくせに、たちまち転向。巨額の振興予算と引き換えに、辺野古の埋め立てにゴーサインを出したのは昨年12月です。記者会見の場で、「いい正月を迎えられる」と嘯（うそぶ）いてみせた様子は、どこか不気味でさえありました。

問題は日本政府です。菅義偉（すがよしのり）官房長官は、知事選を控えた時期に、「関係ない。（辺野古移設の是非論は）終わった話だ」と一蹴してしまいました。翁長勝利の結果が出て、「肅々と（新基地建設を）進めるだけ」だと言い、実際、投票票の2日後には、中断していた海上作業を再開する目的で、工事用の資材の搬入が始められています。県内移設でなければならぬ理由な



翁長さんの当選を 無駄にしない方向に

どありません。にもかかわらず彼らが辺野古にこだわるのは、とどのつまり沖縄に対する差別意識に尽きてしまうのではないですか。短絡的な物言いはしたくないのですけれども、県外や国外の選肢があらかじめ排除されている異常には、合理的な説明が見つからないのです。

ただ、とも考えます。彼らだけを責めて済むならどんなに楽か。ヤマトンチュー（本土の人）の多くが、実は権力者たちと同じような目線で沖縄を見ており、だからこそ現状が招かれてしまっている実態を、今度こそ正面から見据える必要があるはずですよ。

偉そうなことは言えません。東京育ちの私は、若い頃から沖縄には負い目ばかりを感じて、米軍基地の問題でも、自分に口出しする資格などありっこないと思い込み、できれば避けて通りたい本音を隠せませんでした。これはこれで公正とは言えない態度ですよね。

見透かされました。ある時、那覇で、「ヤマトにウチナンチュー（沖縄の人）のことはわからないかもしれない。でも、最初から逃げないでほしい」と叱られたのです。

姿勢を改めたのはそれからです。負い目は負い目。でもしっかり取材して、言つべきことは言う——と。地元新聞の定期購読も始めました。沖縄の人々の立場で物事を見てみようとする努力なしには、何も語れませんから。読み書きを商売にしていない人にも、沖縄の新聞はおススメです。そうやってみんな考えて、行動して、翁長さんの当選を無駄にしない方向に、少しずつでも持っていくことはありませんか。



さいとう たかお／1958年生まれ。『機会不平等』（文春文庫）『ルポ改憲潮流』（岩波新書）『ちゃんとわかる消費税』（河出書房新社）『民主主義はいかにして劣化するか』（ベスト新書）ほか著書多数。